ワタシ、ボク、オレ考

代表取締役社長
鈴木英介



本田勝一のエッセーを読んだ。日ごろ自分が何となく思っている事を、本の中で見つけるとうれしいものである。それはこういった内容だ。

「たとえば第一人称の呼び方となると、『俺』という言葉は失礼だろうか。これも伊那弁（本田勝一は信州は伊那谷の人である＝筆者注）であれば男は『俺』以外は何もないので、いわゆる目上であろうが目下であろうが、すべて俺だけである。（女はすべて『わし』だけである。＝原注）これが東北地方になれば男女をとわずオレだけになるから、もっと無差別であろう。・・・・・だから『俺』だけで育った私は、あの『僕』ボクという言葉が実に卑屈で下品でいやらしくきこえるので、どうしても口にできない。」（なにをもって『国語の乱れ』とするか）

確かに「僕」は「下僕」「家僕」の「僕」であり、もともと奴隷の意味である。「僕」に対して二人称は「君」である。これは「君主」の「君」であり、王の事だ。王様と奴隷ではあまりにも落差が大きすぎる。謙遜も過ぎれば野卑である。

そこで調べてみると、「僕」の語は明治時代に書生言葉として使われるようになったと辞書には書いてある。そこで家にある漱石、藤村をひっくり返して見たが「僕」は出てこない。おそらく、明治期でも一部書生を置くようなお屋敷では、本来の家僕の意味で使われていたのかもしれない。しかし、一般に使われるようになったのはもっと後の事なのではないだろうか。お屋敷に居る書生が「僕」というのを聞いて、かっこいいと思って庶民も使うようになったのだろう。そして、家の本棚からやっと「僕」を見つけたのが、昭和の室生犀星の小説であった。

ついでに蔵書をひっくり返してみると、古事記では一人称は「吾」（ア・アガ・アレ）であり、二人称は「汝」（ナ・ナガ・ナレ）である。有名なイザナギがイザナミにツマドイ（求婚）する場面では、「此の吾が身の成り餘れる處をもちて、汝が身の成り合わざる處に刺し塞ぎて国土を生み成さんとおもふ。」「然らば吾と汝と是の天の御柱を行き廻り逢ひて美斗能麻具波比せむ」となっている。

この上代の「吾」（ア・アレ）が中古では同義の「我」（ワ・ワレ）に変わってきているという。古事記の中でもこの二語は混在してある。その後「己」（オレ・オノレ）「我」（ワシ・ワタシ）が派生してきたのではないだろうか。

ただ、現代使われている「俺」「私」等の漢字はいずれも当て字であろう。広辞苑ではオレは「己」であるし、谷崎潤一郎も「己」（オレ）と書いている。また「私」は「公」に対する概念で、一人称とは意味が違い誤用だと思う。

身近では、当社黒崎地区のオナゴショ（女子衆）も一人称は「オレ」と言っているので、東北と同様、我が新潟も男女とも「オレ」の文化圏であるようだ。また、私は昔、西日本の人で自らを「ワシ」という男性を知っていた。たしかに男も女も「ワシ」という文化圏もある。本田勝一の言うように、信州伊那谷は、男は「オレ」女は「ワシ」で中間的な文化圏なのだろう。

いずれにせよ、「オレ」または「ワシ」こそが正調日本語の一人称なのではないだろうか。これに対して、二人称は「汝」（ナレ）から、時代とともに尊称として「主」（ヌシ）と言うようになったのではないだろうか。地方によってはこれがまって「ニシ」又は「ニッシ」というところもある。新潟では「オメェ」という「御前」である。

私もオレで育っているので、お客さんの所に行っても、つい「オレ」と言いそうになる。そもそも現代日本語では一人称が「ワタシ」「ワタクシ」「ワシ」「オレ」「ボク」と一般的に使われるものでもこれだけある。これ以外に「ワレ」「オノレ」「自分」などある。いったいどの場面でどれを使えば良いのか、迷うのは己だけではないだろう。

そこで迷った末、結局主語は省略してしまう事もある。日本語の文章に主語の省略が多くみられるのはそのせいかもしれない。主語がぐらつくのは困ったものである。

英語では「I」（アイ）、中国語では「我」（ウォ）しかない。男も女も、若者も年寄りも、勿論、社会的地位に関係なくこれである。二人称は「ｙｏｕ」「你」である。

ついでながら、三人称は本来の日本語では男や女、物でも「彼」（カ）である。「彼の都の人はいとけうらに」（かぐや姫）「彼の木を伐（キ）られにけり」（徒然草）となる。

現代使われている「彼・彼女」（カレ・カノジョ）というのは、三人称に男女の別のある英語の訳として近年作られたものであり、本来の日本語ではない。

このように言葉が時代とともに変容していくのはやむを得ない事ではあるのだろうが、あまり、本来の意味からかけ離れた使い方はどうだろう。しかもわが国では、漢字を東アジアで共用しているので、その統一性も考慮に入れなければならない。やはり、オレは「己」、ワタシ・ワシは「我」の漢字を当てた方が良いようにも思う。かつては、そのように表現していた時もあったと思う。

別件ではあるが、妻の事を「カミサン」というが、漱石などは「神さん」とちゃんと漢字で書いている。これをひらがなどで書くと、意味が解らなくなってしまう。

西洋の山には悪魔がいる事になっている。日本の山では女神がいる。富士山の「コノハナサクヤヒメ」が代表だ。山の神なので荒れ狂う時もある。しかし恵をもたらす豊饒の神である。これを「ウチのカミサンが・・・」などと軽々しく言うと罰が当たるはずだ。敬うべし。祭るべし。